

第7章

コロナ禍における中高生の 入試に対する不安と進路選択の意向

— 中学3年生、高校3年生の回答から —

山口 泰史*

第7章まとめ

- 2020年度の受験生は、新型コロナウイルス感染症の流行、大学入試改革という2つの大きな出来事の影響もあって、入試に向けた学習や情報収集、進路をどうするかなどさまざまな不安を感じやすい状況にあったといえます。本章では、「中高生コロナ調査」における中学3年生、高校3年生の回答をみることで、そのような受験生の不安の実態と、それに対するコロナ禍の影響について検討しました。
- 本章ではまず、(1) 入試に対する不安や進路選択に対する意向の回答分布を示しました。加えてコロナ禍の影響に焦点化した分析として、(2) 生徒が所属する学校の休校期間と生徒の入試に対する不安の関連、(3) コロナ禍での家庭の経済状況の変化と、生徒の進路選択に対する意向の関連の2つの検証をおこない、合わせて3つの分析をおこないました。
- これらの分析結果からみる限り、入試に向けた学習や情報収集などに対する不安を受験生の過半数が抱きつつも、自身の学力や家計の状況に合わせて進路形成をおこなう様子がみられました。また、休校期間が長かったことやコロナ禍で家計が悪化したことの影響は不安・意向に関するごく一部の項目でみられるにとどまり、受験生が不安を抱えつつも、状況に応じて柔軟に進路選択をおこなっていた可能性が示唆されました。ただし、コロナ禍に限らず、進路選択における学校間格差や経済格差が存在するため、学校や行政からの制度的支援は依然として重要だといえます。

* 帝京大学

1. はじめに

本章では、「中高生コロナ調査」のうち、中学3年生、高校3年生に回答してもらった、**高校入試、大学入試に対する不安や、進路選択における意向**についてみていきます。

今回の分析の対象となる中高生が卒業した2020年度は、入試に対して2つの出来事が大きく影響した時期であったといえます。

1つ目は、本書全体の問題関心である、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行です。前章までに繰り返し述べられてきたように、新型コロナウイルス感染症の流行によって、多くの中学校や高校が休校を余儀なくされ、中学生や高校生の学習や進学準備は大きな影響を受けました。また、緊急事態宣言などにもなって、家計が急変して進路事情が大きく変わった家庭の存在も想像されます。

2つ目は、高大接続改革、ないしはその一部としての大学入試改革です。これは、とくに大学入試を控えた高校3年生に大きな影響を与えたものと予想できます。2017年(平成29年)7月13日に文部科学省が示した「高大接続改革の実施方針等の策定について」では、2020年度に大学入学共通テストが始まり、そこに記述式問題が導入されること、英語の評価が4技能評価へ転換されること、各大学の個別選抜に関する新たなルールが設定されることが発表されました¹⁾。その後、社会的な議論を経て、2019年度中に、大学入学共通テストにおける記述式問題の導入、英語の4技能評価手段としての外部試験の導入の2つについては、2020年度中の導入が見送られました。しかしながら、大学入試センター試験が廃止されて大学入学共通テストに移行したことをはじめ、2020年度の大学入試はそれ以前と比べて大きく様変わりす

ることになりました²⁾。

これらの出来事は、(本報告書のほかの章でも示されたように) 中高生の学習行動や意識全般に対して影響を与えましたが、そのなかでも、入試を控えた中学3年生や高校3年生の、入試に対する不安や進路選択における意向に、とくに大きな影響を及ぼしたと考えられます。

この章では、入試に対するさまざまな不安や進路選択の意向について、入試を控える中学3年生、高校3年生にそれぞれたずねた項目を取り上げ、どのような不安を感じている生徒が多かったのか、中学3年生、高校3年生のそれぞれについてみていきます。

もっとも、本報告書全体に通底する問題関心は、新型コロナウイルス感染症の流行が子どもたちにもたらす影響です。コロナ禍が受験生の入試に対する不安や進路選択における意向に与えた影響をみるためには、それらに関する質問項目への回答の状況を単に確認するだけでは不十分だといえます。なぜならば、コロナ禍や大学入試改革の影響がなくとも、受験生は元来入試に対する不安などを抱えているものであるからです。入試に対する不安や進路選択に対する意向について一般的にたずねる限り、そこには新型コロナウイルス感染症が流行したことの影響、大学入試改革など社会・制度が変わったことの影響、そして受験生がそもそも抱えている不安・意向が混じり合った結果が、質問紙調査への回答として表れることになります。

そこで、本稿では入試への不安、進路選択に対する意向の分布を提示することに加えて、よりコロナ禍の影響に焦点化した検討として、以下の2つの分析結果を示します。1つは、**学習や情報収集面に対するコロナ禍の影響をみるために、生徒が所属する学校の休校期間の長さ、入試に向けた学習や情報収集に対して生徒が抱える不安の関連**を検討す

る、というものです。もう1つは、経済的側面に対するコロナ禍の影響をみるために、コロナ禍にともなう家計の変化と、進路選択において経済面で生徒が抱える不安に基づく意向の関連を検討する、というものです。

これらの分析は、新型コロナウイルス感染症が流行したことの影響により焦点化した検討ではありますが、新型コロナウイルス感染症だけの影響を切り取っていると言い切ることにはできません。分析結果を解釈する上でこのような限界については、3節での分析結果の整理や4節の議論のところであらためて述べたいと思います。

以下、2節では、本章の分析に用いるデータと質問項目およびその処理方法について説明します。その上で、3節において、上に述べたような検討の結果を示し、4節において、それらを総括して議論をおこないます。

2. 分析に用いるデータと質問項目

本稿の分析では、2020年8～9月に実施された「中高生コロナ調査」を中心に用い、必要に応じて、2020年に実施された「子どもの生活と学びに関する親子調査2020」における回答も併せて使用します。調査設計等については第1章において、具体的に記述されています。

調査時期やその関係性についても、第1章において詳述されていますが、ここでも少し整理しておきます。新型コロナウイルス感染症の拡大を受け、文部科学省は全国の小学校、中学校、高等学校および特別支援学校等に対して、2020年3月2日からの休校を要請しました³⁾。その後、地域や学校によっては3か月近くにわたって休校することとなりました。また、7都府県では2020年4月7日から、4月16日には全国を対象を拡大して、

緊急事態宣言が発出され、最長で一か月半にわたって続くことになりました。「中高生コロナ調査」は、一斉休校と緊急事態宣言(1回目)を経て3～4か月後に実施されていることとなります。8～9月の実施であるため、一般的にはおおそ志望校が定まり、大学受験におけるAO入試が始まる頃の調査となっています。

主に用いる質問項目は、「中高生コロナ調査」の、高校入試についてたずねた質問項目(Q46)と大学入試についてたずねた質問項目(Q48)です。これらには、中学3年生(Q46)と、高校3年生(Q48)のうち、一般入試または推薦入試を受けて進学する予定の生徒が回答しています。個々の項目については、次節の分析にて、文言を短縮せずに掲載していますので、ここでは省略します。個々の項目に対して、「とても感じる」、「まあ感じる」、「あまり感じない」、「まったく感じない」という4つの選択肢で回答を求めており、以下の分析では特に言及している場合を除き、そのまま分析に用いています。Q46とQ48に含まれる項目のうち、推薦(・AO)入試に関する項目、浪人に関する項目については分析に用いていません。分析に用いなかった項目も含めて、ウェブサイト上の質問紙に掲載されています。

なお、これらの質問項目についてあらためて付言しておきたいのは、新型コロナウイルス感染症や入試改革の影響に限定して問うている質問項目ではないということです。もちろん、この質問項目が含まれる調査自体は新型コロナウイルス感染症の流行を受けて実施された追加調査です。その中には新型コロナウイルス感染症が与えた影響についてたずねる質問項目も多く含まれるため、回答者が新型コロナウイルス感染症の影響についてまったく想定せずに回答しているとはいえませんが、新型コロナウイルス感染症が流

行する以前から、受験生は入試に対してさまざまな不安を抱いてきました。そのように、新型コロナウイルス感染症や大学入試改革にかかわらず、受験生が持っている不安や意向に、それらの影響が合わさったものとして、この質問項目を捉える必要があります。このことに留意しつつ、3節と4節では結果の確認と解釈をおこなっていきたいと思います。なお、大学入試改革は、直接的には高校生に対してのみ影響を及ぼしたと考えられます。そのため、中学3年生と高校3年生で何か異なる傾向が確認された場合、その点について大学入試改革の影響という観点から解釈することができるかもしれません。

コロナ禍の休校期間については、「中高生コロナ調査」で「学校が休みになり、学校の授業がなかった期間（休校期間）」としてたずねており、「1か月以下」、「2か月くらい」、「3か月以上」の3区分にまとめて分析に使用しています。詳細は省略しますが、調査全体でみると、回答の5割近くが「3か月以上」に含まれ、「2か月くらい」がおよそ3割、残りが「1か月以下」という分布になっています。

コロナ禍での家計の変化は、「子どもの生活と学びに関する親子調査2020」の保護者調査で、「新型コロナ感染拡大の影響は、今年の収入にどれくらい変化をもたらそうですか。昨年度の収入（世帯全体）と比べてお答えください」とたずねたものを使用しています。収入の減少と進路選択の関係が検討の主眼にあるため、「かなり減ると思う」と「多少は減ると思う」と回答したケースは「収入減少」とまとめ、「変わらないと思う」「多少は増えると思う」「かなり増えると思う」と回答したケースは合わせて、「変化なし・収入増加」とまとめました。「わからない・答えたくない」との回答や無回答は分析から除外しました。

3. 中高生は、入試への不安や進路選択の意向をどのように抱いているか

3.1. 中学3年生が抱いていた入試への不安と進路選択に対する意向

まずは中学3年生からみていきます。入試に対する不安や進路選択に対する意向の各項目に対して「とても感じる」、「まあ感じる」と回答した比率（中学3年生）を【図7-1】に示しました。図から結果を読み取りやすくするために、「あまり感じない」と「まったく感じない」は省略しています。これは以降も同様です。なお、ここで取り上げる、不安・意向についての11個の項目がそのまま並ぶと見づらいため、項目を5つのカテゴリに類型化し、カテゴリに合わせて、質問紙での項目順から順序を入れ替えた上でカテゴリを左端に付与しています。

図7-1をみると、11項目のうち10項目において、「とても感じる」の比率と「まあ感じる」の比率の合計が50%を超えており、これらの不安や意向を半数以上の生徒たちが感じていることがわかります。少なくとも2020年度の、高校受験を控える中学3年生にとって、入試に対する不安を抱えていることや、ここに挙がっているような意向（「確実に合格できる難しさの高校を受験したい」、「親の希望によらず、自分の行きたい高校を受験したい」、「進学の費用があまりかからない進路を選択したい」）を持っていることは一般的だったといえます。

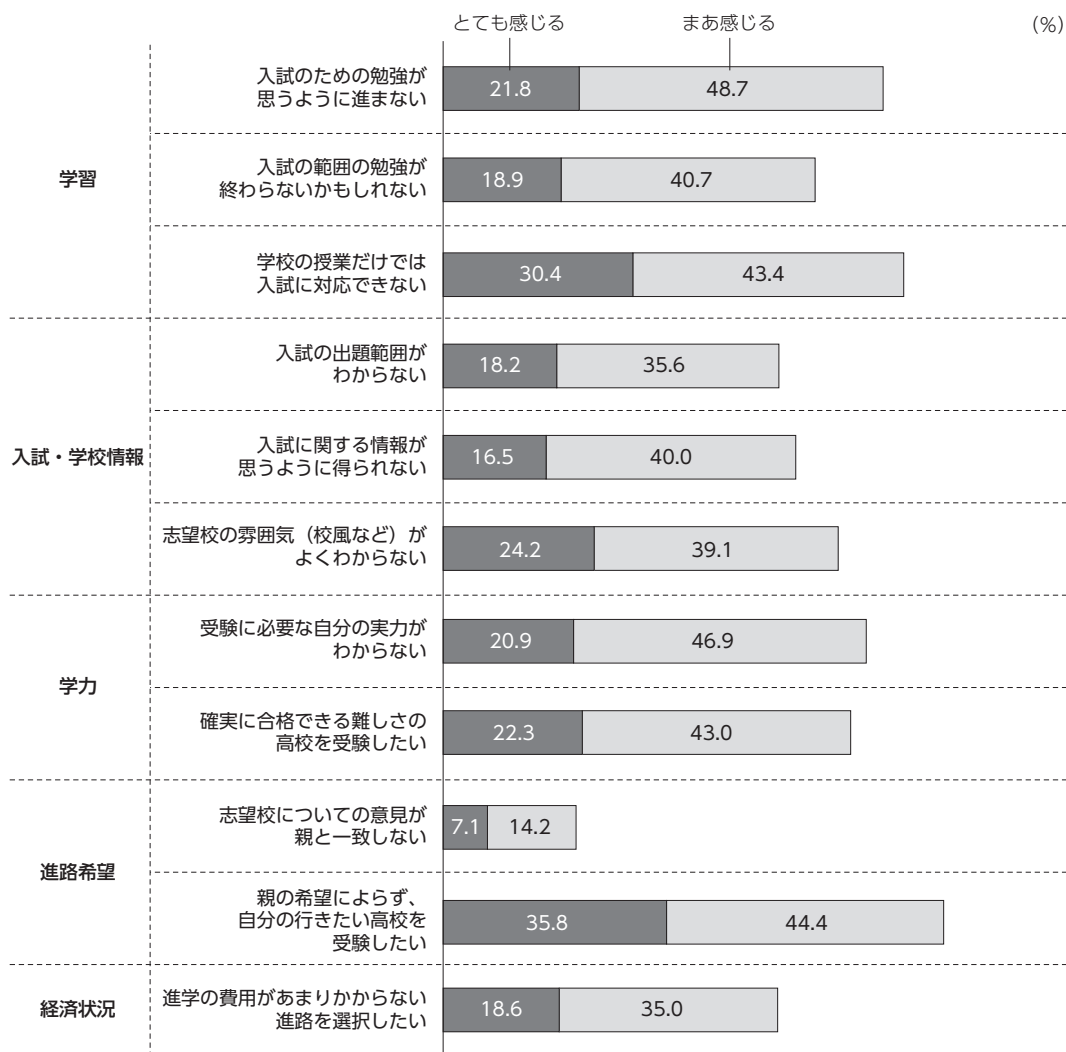
「志望校についての意見が親と一致しない」のみ、「とても感じる」の比率と「まあ感じる」の比率の合計が50%未満でした。この項目では、「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が21.3%と、ほかの項目に比べて、きわめて小さくなっています。新型コロナウイルス感染症が流行し、学習の見通しや入試の合格水準までの距離を見通せない中であって

も、志望校についての意見を親とすり合わせ、多くの親子で意見が一致している（と子どもが認識している）状況にあることが、このことからうかがえます。ただし、「親の希望によらず、自分の行きたい高校を受験したい」という意識は大半の生徒が有しており、もし進路に対する意見に親とのズレがあった場合でも、自分の意見を押し通したい思いがあることが分かります。

3.2. 高校3年生が抱えていた入試への不安と進路選択に対する意向

次に高校3年生についてみてみましょう。結果は【図7-2】に示しています。高校3年生では、中学3年生でも示した11項目に「自宅から通える範囲の大学に進学したい」、「経済的な理由で進学できないかもしれない」の2項目を加えた13項目について、検討をおこなっています。なお、図7-1と同様に、

図7-1 中学3年生の入試への不安と進路選択に対する意向



*サンプルサイズは、565である。

項目を類型化して、カテゴリ名を左端に付与しています。

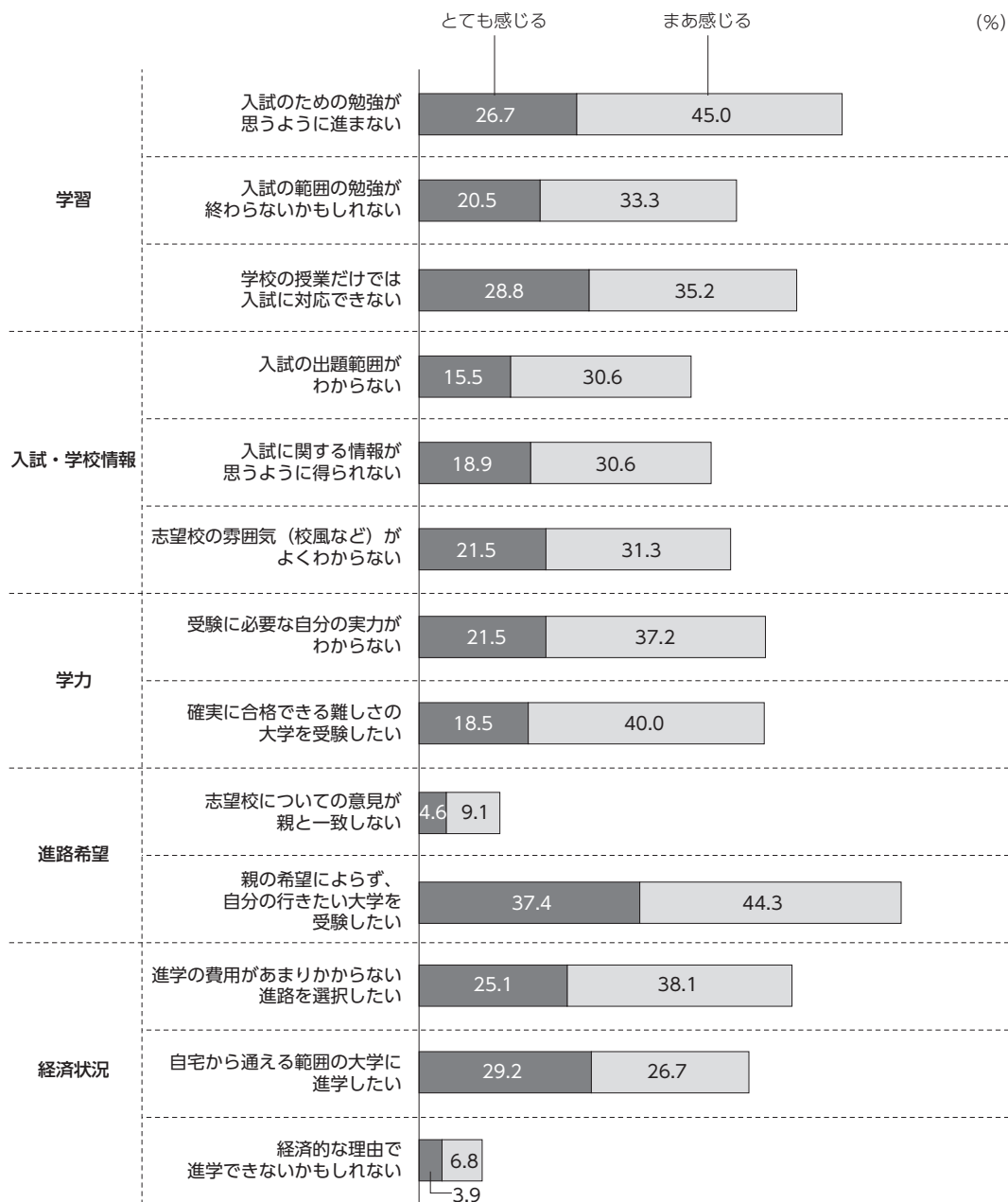
図7-2をみる限り、高校3年生でも、前項の中学3年生とおおよそ同様の傾向がみられます。13項目のうち、9項目で「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が50%を超えており、高校3年生が、入試に

向けてこれらの不安や意向を一般的に感じている様子がうかがえます。

「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が50%未満となっている項目についても整理しましょう。

「志望校についての意見が親と一致しない」は、中学3年生でも「とても感じる」+「ま

図7-2 高校3年生の入試への不安と進路選択に対する意向



※サンプルサイズは、438である。

あ感じる」の比率が50%を切っていましたが、高校3年生でも同様に50%未満となっています。新型コロナウイルス感染症の流行や大学入試改革の影響で、例年と比べて進路の見通しをつけにくいと想像されるなかにあっても、親との志望校のすり合わせは大半の生徒でうまくいっている状況にあったようです。

「志望校についての意見が親と一致しない」のほかに、「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が50%未満だったのは、「入試の出題範囲がわからない」、「入試に関する情報が思うように得られない」、「経済的な理由で進学できないかもしれない」の3項目です。

本章の冒頭で述べたように、大学入試改革が進む状況や、新型コロナウイルス感染症の流行下で日本経済が悪化する状況があるなかで、これらを「感じ」ているケースが相対的にみて少ないことは、やや意外な結果だといえるかもしれません。一方で、大学入試改革が進んでいるからこそ、大学や教育関連企業が積極的に入試情報を公開し、高校生やその親も情報収集に熱心になっている状況があったかもしれません。また、新型コロナウイルス感染症の流行に基づく家計の急変に対しては、奨学金の提供が積極的におこなわれる状況も見られました⁴⁾。そのことが影響しているとも考えられます。この点については、次の項の分析結果も含めて考えてみる必要があります。

なお、今回の調査は2021年3月高校卒業者が対象であり、2020年3月以前の高校卒業生には同様の調査をおこなっていないため、大学入試改革や新型コロナウイルス感染症の流行以前の高校3年生と比べて、これらの項目に対する「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が上昇したのか、あるいは低下したのかという情報は、残念ながら得られません。ここではあくまで、上述のような大

学や教育行政、教育業界、また生徒や親側の対応もあってか、「入試の出題範囲がわからない」、「入試に関する情報が思うように得られない」、「経済的な理由で進学できないかもしれない」の3項目について肯定するケースよりも否定するケースの方が多い状況にあった、と述べるまでにとどめておきます。

3.3. 新型コロナウイルス感染症流行にともなう休校と、その影響

前項までに、中学3年生、高校3年生の入試に対する不安や進路選択に対する意向の分布を確認しました。分析の結果、受験生たちの多くが不安を抱えていることが分かりました。では、新型コロナウイルス感染症の流行は、受験生たちの入試に対する不安や進路選択に対する意向に対して、どのような影響を与えたのでしょうか。本章の冒頭で述べたとおり、休校と家庭の経済状況の悪化の2つの影響をみていきますが、まず休校期間の長さや、学習・情報収集に対する不安の関連について、本項でみていきます。

【図7-3】に示したのは、個々の生徒が所属する学校の休校期間別にみた、入試に向けた学習進度、情報収集に対する不安の回答(中学3年生)です。学習進度、情報収集に対する不安について7項目を示していますが、どの項目においても、休校期間による違いがほとんどみられない、ということがわかります。カイ二乗検定という統計学の手法を用いて、休校期間によって回答傾向が違うのかどうかを7項目それぞれで確認したところ、「入試の出題範囲がわからない」を除き、休校期間によって、統計学的に意味のある違いはみられませんでした。

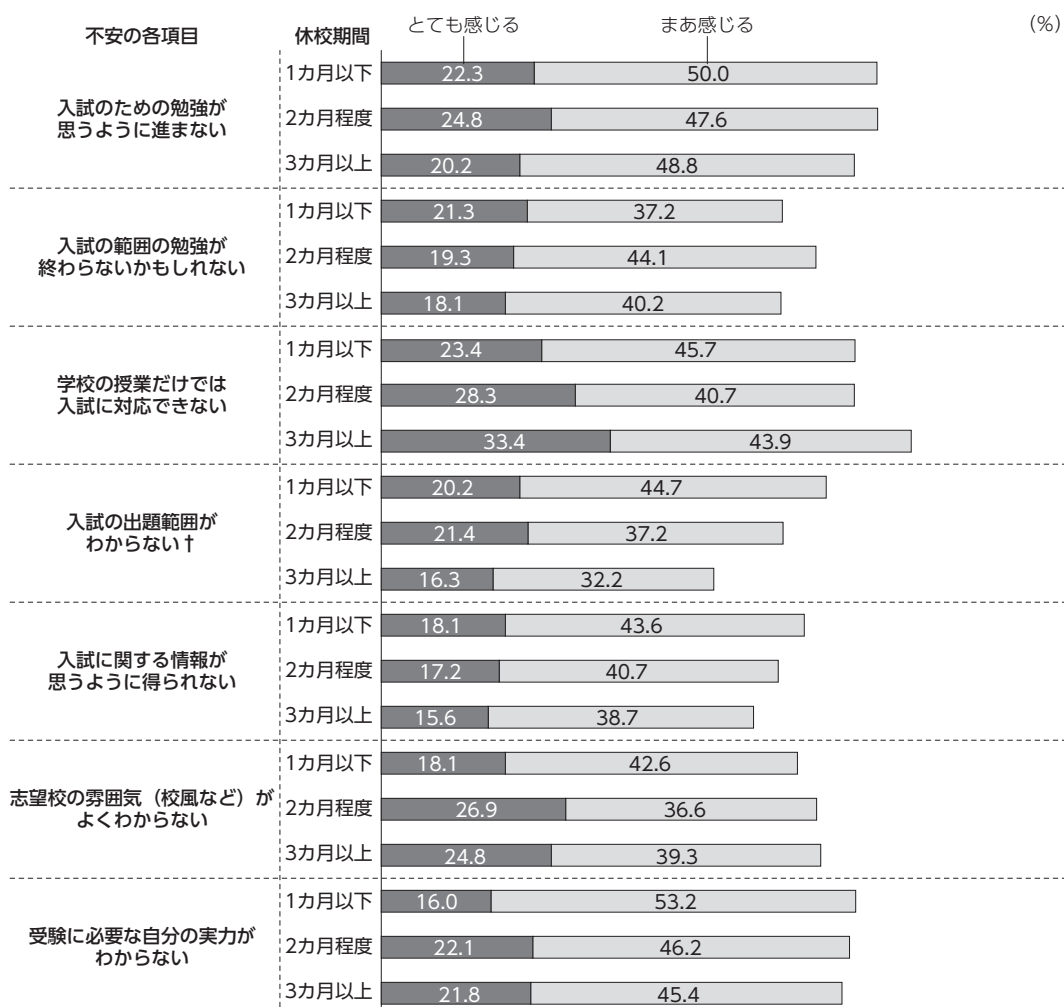
休校期間は地域などによって異なりますので、図7-3の結果から、休校期間を長くしたとしても受験生の(出題範囲に関するものを除いた)不安が強まったりはしない、といっ

た因果関係を念頭に置いた結論を導くことはできません。とはいえ、個々の生徒や親、教員の尽力もあってか、休校期間が長かった中学生においても、(平均的には) 不安を強く抱えてしまう状況にはならなかった、とってよいでしょう。

なお、休校期間ごとの差が唯一みられた「入試の出題範囲がわからない」についても、休校期間が長いとそのような不安が小さくなるという関連になっています。本来予想される、休校期間が長いと学習の遅れや情報不足への不安が強まるという傾向とは逆の関係になっ

ています。都道府県によって休校期間が異なることや、通塾によって学習・情報収集の不安が解消されている可能性を考慮して、「入試の出題範囲がわからない」ことへの複数の要因の影響をみる重回帰分析をおこなってみました(分析結果は省略)。これは、「入試の出題範囲がわからない」に対する都道府県(東京都とそれ以外、都市規模別)、通塾、休校期間、のそれぞれの影響について、お互いの影響関係を考慮して検討をおこなう統計的分析です。しかし、このような分析をおこなっても、都道府県、通塾の影響は確認できず、

図7-3 入試に向けた学習・情報収集の不安(中学3年生、休校期間別)



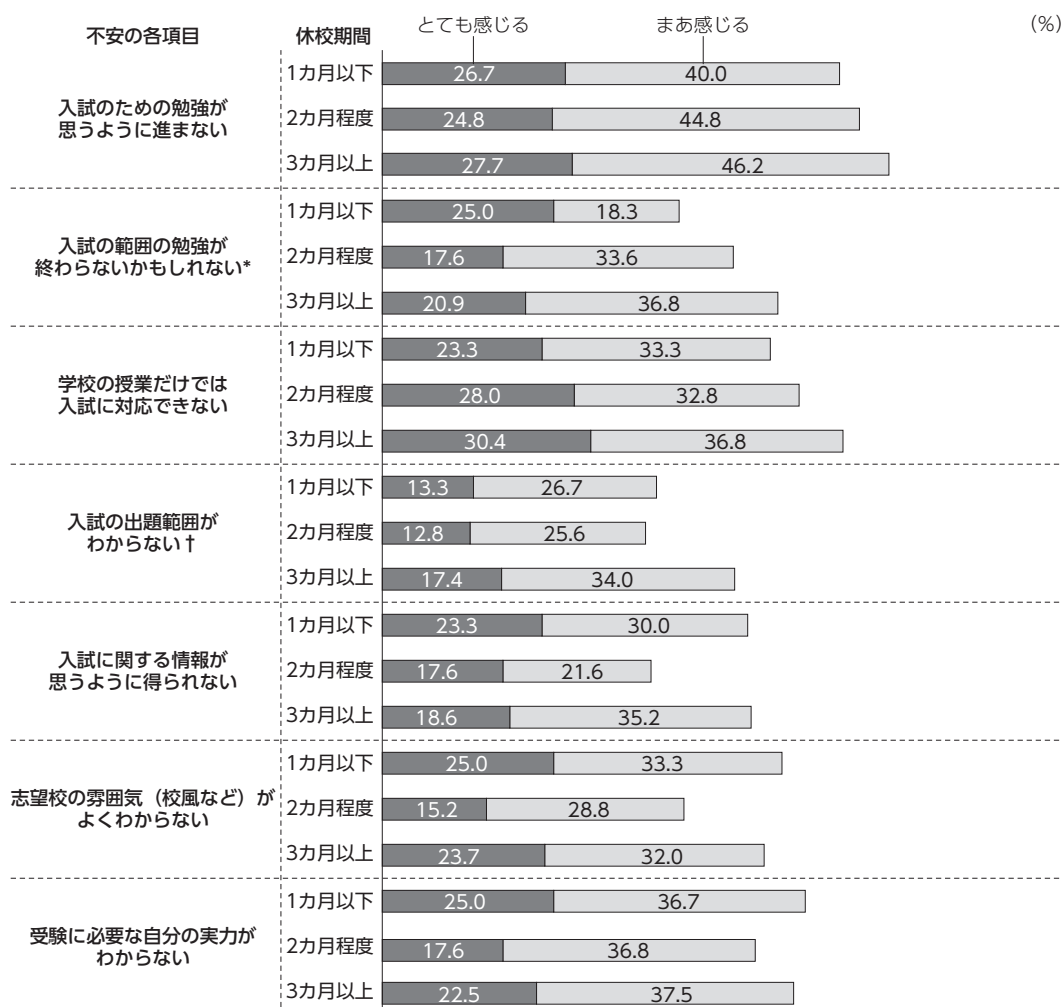
* サンプルサイズは、休校期間が「1か月以下」94、「2か月程度」145、「3か月以上」326である。

† p<0.10。

休校期間と「入試の出題範囲がわからない」の関連のみが確認されました。あくまで推測の域を出ませんが、休校期間の長さによって、生徒自身や親、そして学校の先生の対応が違っていただとも想像されます。たとえば、休校期間が長いと、不安になった生徒やその親がインターネットなどを用いて熱心に試験情報を調べたり、教員が積極的に生徒に情報提供をおこなったりすることも考えられます。そのような対応の違いによって、「入試の出題範囲がわからない」における、図7-3にみられた違いが生じているのかもしれませんが。

次に、高校3年生の結果【図7-4】をみていきます。高校3年生では、「入試の範囲の勉強が終わらないかもしれない」と「入試の出題範囲がわからない」の2項目において、休校期間による違いがみられました。ただし、「入試の範囲の勉強が終わらないかもしれない」については、「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が大きくなるというよりも、「とても感じる」の比率、「まあ感じる」の比率それぞれが変動する、という傾向にあり、一概に、休校期間が長かった人ほど「入試の範囲の勉強が終わらないかもしれな

図7-4 入試に向けた学習・情報収集の不安（高校3年生、休校期間別）



*サンプルサイズは、休校期間が「1か月以下」60、「2か月程度」125、「3か月以上」253である。

** p<0.05, † p<0.10。

い」ことへの不安が大きいともいえません。「入試の出題範囲がわからない」については、休校期間が3か月以上だった生徒でやや肯定する比率が高い傾向があることがみてとれます。

それら以外の項目においては、少なくとも統計学的にも意味のあるような違いはみられませんでした。すなわち、図7-4で休校期間によって違いがあるように見えても、誤差によってそうみえているだけの可能性が高いということになります。

繰り返しになりますが、これらの分析から、休校期間が中学3年生、高校3年生の入試(とくに学習進度や情報不足)に対する不安と与える影響が小さいということではできません。休校期間の長さの背後には、居住地域や学校

設置者、その学校の生徒の状況などの違いがあると考えられるためです⁵⁾。

ここでの分析結果からいえるのは、それらの差異や、生徒、親、先生たちの個々の努力などの結果も含めて、休校が長い学校でも、生徒が不安を感じやすいような状況は、平均的にはほとんど確認されない、ということです。

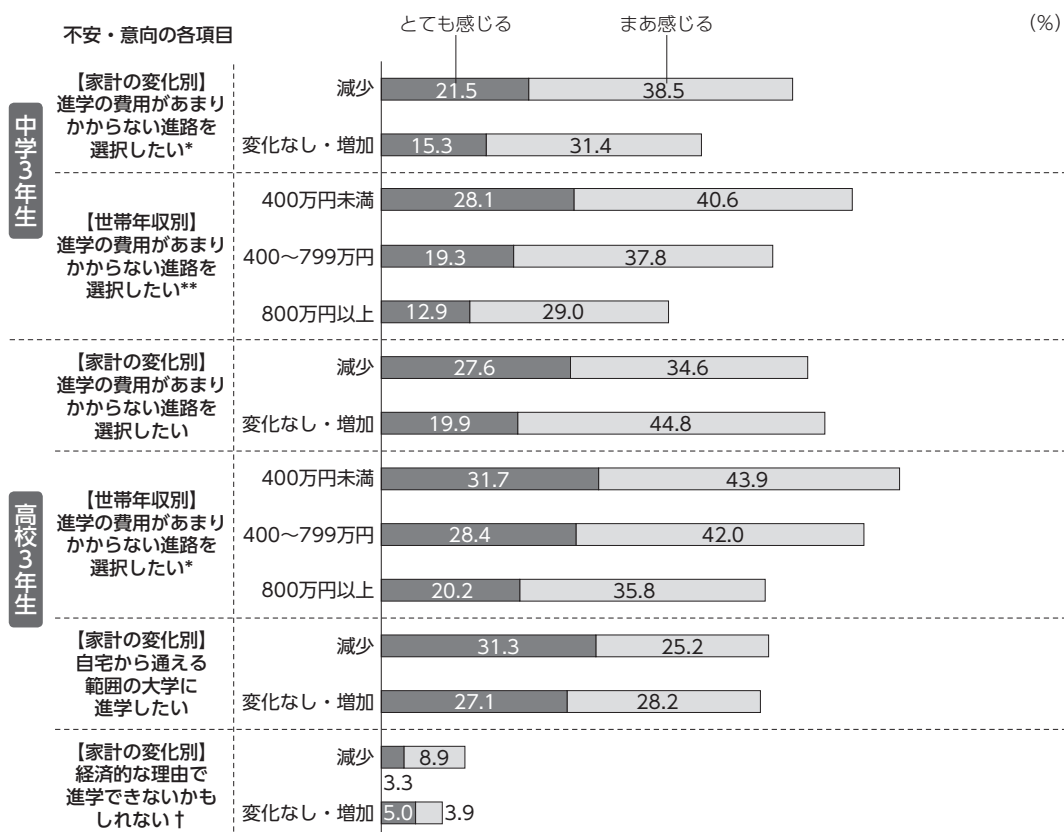
3.4. 新型コロナウイルス感染症流行に

ともなう家計の悪化と、その影響

最後の分析として、コロナ禍での家庭の経済状況の悪化と、進路選択における不安や意向の関連をみてみましょう。

【図7-5】には、コロナ禍での家計の変化状況別に、進路選択における不安と意向に

図7-5 進路選択に対する不安と意向(家計の変化状況別)



※ ** p<0.01, * p<0.05, † p<0.10。

ついでに項目の回答を示しています。中学3年生では、「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」、高校3年生は同じ項目に加えて、「自宅から通える範囲の大学に進学したい」、「経済的な理由で進学できないかもしれない」をみています。なお、後述するように分析結果を整理する上での参考として、世帯年収別の結果も一部示しています。

まず、中学3年生について確認します。「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」について、コロナ禍によって家計の状況が悪化していると、そうでないケースに比べて、進学のコストがあまりかからない進路を選択したいと考える比率が高くなっていることがわかります。参考として、世帯年収別に「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」への回答も示しましたが、こちらでも世帯年収が相対的に低い場合に、進学のコストがあまりかからない進路を選択したいと考える比率が高くなっています。「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」に対して、家計の変化と世帯年収の2つが与える影響を同時に検討する重回帰分析をおこなってみると、家計の変化が「減少」、つまり家計が悪化していると、また、世帯年収が「400万円未満」だと、「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」とより強く考える傾向にあることがわかりました。このことから、そもそも経済的に豊かでない家庭では、進学のコストがあまりかからない進路選択をおこないやすく、それに加えて、コロナ禍で収入が減少することによっても、進学のコストがあまりかからない進路選択をおこないやすくなっている可能性が示唆されます。金銭的に苦しいことだけでなく、(相対的にみれば豊かだったとしても)それまでと比べて苦しくなったということが、進路選択に対する意向に影響しているのかもしれません。

続けて高校3年生について確認します。高

校3年生で確認した不安や意向の3項目では、「経済的な理由で進学できないかもしれない」を除き、統計学的にみて意味のある差異は確認できません。「経済的な理由で進学できないかもしれない」についても、少なくとも図7-5の数値でみる限り、家計「減少」層でも「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が12.2%と比較的小さく、「変化なし・増加」層との差も5ポイント未満と小さい状況です。

ただし、参考として示したように、世帯年収別に「進学のコストがあまりかからない進路を選択したい」の回答を確認すると、世帯年収が相対的に低い層ほど、「とても感じる」+「まあ感じる」の比率が大きくなっています。具体的にみれば、800万円以上の層(20.2%+35.8%=56.0%)と、400万円未満の層(31.7%+43.9%=75.6%)では、約20ポイントの差があります。

これらの結果から、大学進学を目指す高校3年生においては、コロナ禍によって家計の変化が生じたかどうかではなく、結局のところ、家庭の経済状況が豊かでない場合に、進路選択において費用を考慮する傾向が強くなっていることがわかります⁶⁾。そう考えると、コロナ禍における家計の変化という問題も結局のところ、家庭の経済状況に基づく進路格差(小林, 2008)の議論に回収されるものだといえるかもしれません。

4. おわりに

本章では、中学3年生、高校3年生の入試に対する不安や進路選択に対する意向について、まず個々の回答分布を確認しました。それに加えて、コロナ禍の影響により焦点化するために、休校期間と入試に向けた学習・情報収集の不安の関連、家計の変化と進路選択における意向の関連について確認してきま

した。

分析結果は、以下の4点にまとめることができます。第一に、中学3年生、高校3年生ともに、2020年度の受験生の過半数は、学習や、情報不足、自身の実力などに対して不安を抱えていました。第二に、不安を抱えるなかでも、親子で志望校についての意見は一致しており、高校生では、経済的な理由で進学できないことを懸念する層が全体の1割ほどであることがわかりました。第三に、コロナ禍での休校期間の違いは、平均的には、学習の遅れや情報不足への不安の大きさに結びついていませんでした。第四に、コロナ禍での家庭の経済状況の悪化は、中学3年生では進学費用のあまりかからない進路を選択することに結びついていましたが、高校3年生ではそのような関連はみられませんでした。もっとも、中高生どちらにおいても、そもそも経済的に豊かでない家庭では、進学費用のあまりかからない進路を選択しようとする子どもたちの意向がみられました。なお、上述のようないくつかの違いがありつつも、中学3年生と高校3年生で、入試に対する不安や進路選択に対する意向における傾向の明確な違いはみられなかったといえます。

本報告書で用いられる調査データからは、入試に対する受験生たちの不安や進路選択の意向が、新型コロナウイルス感染症の流行に起因するのか、大学入試改革などの制度改革に起因するのか、それとも2020年度にかかわらず、受験生たちがもともと抱えているようなものなのか、切り分けて確認することができません。しかし、本章で検討した入試に対する不安や進路選択の意向についての項目は、変動する社会情勢や入試制度の下で、受験生たちがどのように不安を抱え、進路選択をおこなおうと考えて、入試を乗り切ってきたのかを総合的に捉えるものであったといえます。

2020年度の受験生は、社会情勢や入試制度が大きく変化するなかで、学習や情報収集、自分の実力認知などに不安を抱えつつも、親との意見をすり合わせ、学力や経済状況に合わせて柔軟な進路選択をおこなうことで、そのような不安を乗り切っている様子が見受けられます。根拠に立脚した言及ではないために仮説の域を出ませんが、そのような生徒の進路選択には、親や先生たちのサポート、また教育機関や国・地方自治体、教育関連企業の制度的支援が影響したと想像されま

す。そのような背景もあってか、新型コロナウイルス感染症流行の影響についても、本章の分析でみる限りは、受験生の入試に対する不安や進路形成に対する影響は限定的だったといえます。しかしながら、家庭の世帯年収によって「進学の費用があまりかからない進路を選択したい」に対する回答傾向が変わることからも示唆されるように、家庭の経済状況による教育格差はけっしてコロナ禍に限定されたものではありません⁷⁾。コロナ禍でおこなわれた、学校や行政からの制度的支援が受験生の不安への対処や進路選択にとって有用だったのであれば、そのような制度的支援を継続していくことが、教育格差の改善に結びつく可能性があります。

本章の分析には、ここまでにも述べてきたとおり、多くの限界がありますが、その1つとして、具体的にはどのような制度的支援が、コロナ禍における受験生の不安や教育格差を改善したのかを明らかにできなかったことが挙げられます。このうち、学校の先生や親のどのようなかわりか、子どもの学習状況や心理状況に対して影響を持ちえたのかについては、本報告書の他の章における分析と議論が有用ですが、今後の課題としても提示しておきます。

また、本報告書全体に通底することではあ

りますが、分析したデータは、あくまで2020年に実施された調査のものであり、コロナ禍が続く一方で、大学入学共通テストは2年目を迎えた2022年現在においては、状況に変化が生じている可能性があります。「子

どもの生活と学びに関する親子調査」は2020年以降も毎年実施されていますので、そのデータでおこなえる範囲での追加検証をおこなっていくことも今後の課題だといえます。

【注】

- 1) 文部科学省, 2017, 「高大接続改革の実施方針等の策定について」(https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/07/1388131.htm, 2021年5月21日取得)。
- 2) 大学入試改革の専門的な分析については、たとえば木村(2020)を参照してください。
- 3) 文部科学省, 2020, 「全国一斉臨時休業関係(2/28～春季休業前まで)」(https://www.mext.go.jp/a_menu/coronavirus/mext_00006.html, 2021年5月21日取得)。
- 4) たとえば、日本学生支援機構が新型コロナウイルス感染症にともなう家計急変者への給付型奨学金を2020年度よりおこなっています(日本学生支援機構, 2021, 「新型コロナウイルス感染症に係る影響を受けて家計が急変した方への支援」, https://www.jasso.go.jp/shogakukin/kyufu/kakei_kyuhen/coronavirus.html, 2021年5月21日取得)。
- 5) 実際に本章のデータで確認したところ、学校設置者(国立/公立/私立)による休校期間の長さの違いはみられませんが、政令指定都市・特別区に居住しているケースの場合、それ以外のケースと比べて休校期間が3か月以上であった比率が中学3年生、高校3年生ともに大きいことが確認できました。
- 6) 世帯年収と家計の変化の関連を確認したところ、高校3年生のケースにおいては、世帯年収が低い層ほど家計の変化「減少」の比率が大きい傾向がみられました。もっとも、家計が悪化した結果として世帯年収が低い層にカテゴライズされることになった可能性もあります。一方で、中学3年生のケースでは、10%水準でも統計的に有意な関連は確認されませんでした。家計の変化と「進学費用があまりかからない進路を選択したい」という回答に関連がみられるのは、中学3年生の方であるため、もともと家計が苦しい層においてコロナ禍でより家計が悪化して、進路変更を迫られることになる、といった状況は、少なくともこのデータではみられない、ということになります。
- 7) このことについては、教育社会学の分野を中心に、さまざまなデータを用いた実証的把握がなされてきました。それらの研究群を踏まえた、データを用いた実態の把握には、松岡(2020)などが有用です。

【参考文献】

- 木村裕, 2020, 「揺れる日本の大学入試改革—その実態と挑戦」伊藤実歩子編著『変動する大学入試—資格か選抜か ヨーロッパと日本』大修館書店, pp.235-264.
- 小林雅之, 2008, 「進学格差—深刻化する教育費負担」筑摩書房.
- 松岡亮二, 2020, 「教育格差—階層・地域・学歴」筑摩書房.